

熱塩加納型学校給食を考えて

福島県喜多方市熱塩加納町 山口 潔

私の住む福島県喜多方市熱塩加納町は、30年前から有機農業をJA主体で開始し、現在水稲では33名が約40haで有機栽培を行い、私もまた2haで有機JAS認証を取得している。学校給食においては20年前から、当時のPTA・栄養士・農協職員とを中心に、子供達に地元の米・野菜を食べさせたいとの願いから、米は特別栽培の「さゆり米」で週5日完全米飯給食を確立、野菜は私も参加している「まごころ野菜の会（会員30名余り）」での供給により食材がまかなわれ、現在、小・中学校および幼稚園生約310名が毎日給食を食べている。このいわゆる「熱塩加納型給食」は学校・地域・家庭といった給食を取りまく全ての人々の努力が生んだ結晶と言っている。

先頃「まごころ野菜の会」の総会が行われ、その中で供給者・栄養士・調理職員・地元教育委担当者らが更なる改善を見いだすべく討論し合った。例えば、約120品目におよぶ野菜・果実の値段の見直し（同じ品目でも季節によってちがう）、調理場側と供給者側とで取りあつかいたい野菜をいかにバランスよく保つか、そのために計画的栽培とお互いの連絡を密に取り合うとか、全員が真剣に意見交換した。“うちにいっぱいいいネギがあったんだけど供給予定表に書かなくて使ってもらえるかどうかわからなかった”“連絡を下さい、すぐ献立を見直しますから”等々、皆いままで築き上げてきたものを維持・発展させていきたいのである。

そんな中、この冬「食育と雇用」に関するちょっとした騒動がおこった。学校給食の臨時調理人の雇い止めである。

平成18年に合併し新・喜多方市となった市側は「臨時職員の雇用は3年まで」の条例をたてに、合併前の旧町村で長い人は20年以上も学校給食に携わっていた職員を解雇したのである。臨時職員側は労働組合を結成し白紙撤回を求める署名活動を行う一方、市側との交渉を続けた。労働基準監督署から“雇い止めは無理がある、双方で交渉を”の指導もあったが、市側はそれ以降労組との交渉に応じず新たな臨時職員の募集を行い、4月からその体制で学校給食が作られている。

私は今回の市側の対応に不満を覚えている。「熱塩加納型給食」には臨時調理職員の存在が非常に大きいと考えるからだ。それは私達野菜供給者側は量の注文を受けるだけで基本的に無規格・無選別。私はトマトを多く出すが大きさはバラバラの時がある。それをみごとにカット・調理し子供達に食べさせる調理人達に頭が下がる。ある意味、経験に裏打ちされた技術者と言っている。

子供達が口にする給食なのだから「安全・安心」はあたりまえ。給食に携わる全ての人達が、まさに“まごころ”を持ってそれぞれの立場で働いていけるか。その一辺でも崩れれば全てダメになってしまう。そんな事を改めて考えさせられた今回の問題であった。

この「熱塩加納型給食」は、村が町になってもその小ささを生かし、「独自の文化」を継承し、当初はいわば自然発生的に誕生したものを今後いかに目的意識的に発展させるかが課題ではないだろうか。

（やまぐち きよし）